# 魔王様に復讐を

羽賀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王様に復讐を

【Ｎコード】
Ｎ８０７９Ｇ

【作者名】
羽賀

【あらすじ】
人間と魔族が共存する世界。それがどうしても許せない少女リィフィは……。作者初めての短編。続きもあるはず。

人間と魔族の戦争。それは、古来より続いてきた、一種の営みであった。
世界の覇権を賭け、両者は激しく争いあう。
たとえ何人魔族の餌にされようが、たとえ何人人間たちに殺されようが、両者は戦いを、争いをやめることなどなかった。
……なんてことも、今は昔……。

＊

「ねぇちゃん！　酒くれ！　大盛りな！」
「はいはいただいまーっ！」
「こっちもなー！」
さまざまな声が入り乱れる、酒臭くてじめじめして薄暗い陰気な大部屋。つまりは酒場なのだけれど、私はそこでバイトをしている。何の可愛げもない、地味な色のエプロンドレスに身を包んだ私は、酔っ払ったお客さんからボディタッチを受けたり、お尻を撫で回されたり、胸を触られたりするような苦労にも負けずに、日々を精一杯生きている。ていうか、同僚のキャシーの方が可愛いエプロンドレスってのはアレなの？　胸が大きいからなわけ？　胸ってそんなに重要なの？　ああ、いけない、話が逸れちゃった。
私はトレイ片手に厨房に向かい、そこにある、酒入りのジョッキを適当にトレイに置く。丁寧に置いていく暇なんてない。お客っていうのはいつも私たちのことなんかお構いなしに、どんどん、遠慮なく注文をしてくるのだから。持っていくのに時間がかかればクレームがついて、イコール減給になってしまう。大事なのは、スピード。だから、勢いよく置いたときに、一割くらい空中に飛び散って

も私は知らない。それに、これは注文だらけのお客さんへの、ささやかな抵抗だし。
ジョッキを五つほど載せ、私は厨房を出た。ほんと、酒飲みってのはうるさくて敵わない。酒を飲んだだけで、あんなにハイになれるなんて不思議すぎる。まあ別にどうでも良いんだけど。
何個かジョッキを配り終えて、最後の客。ここから二十メートルもない距離にいるのだけれど、私は少し躊躇した。そこにいるのは、豚のような鼻に、鋭い牙、ぐりぐり動く気持ち悪い目に、毛深い全身を持った、魔族なのだから。私が彼に近づくのを躊躇していると、彼の目がこちらを捕らえた。にごった、魚の住めないようなドロドロとした瞳でこちらを見られて、思わず胃から何かこみ上げてくる気がした。といっても、こみ上げてくるものなんてパンの耳くらいなんだけど。
「なんか、文句あんのか？　ああ？」
「い、いえ……そんな、滅相もない……あは、あはははは」
私は取り繕った笑顔で、心にもない事を述べてみせる。『文句あるのか』ですって？　そんなの、あるに決まってる。
――魔族と共存する世界なんて……、私の故郷を奪った魔族と共存だなんて、死んでもごめんだ！
そう、心の中で叫んでいた私だったけど、ここはバイト暦一年のプロ。作り笑いを、うそくさい笑みを顔に貼り付けつつ、ジョッキを乱暴に魔族の目の前に置いた。ここで変な言いがかりをつけられてもつまらない。一刻も早くここを立ち去ろうと、私は踵を返した。
「待てよ姉ちゃん」
「なんですか」
思わず、自分でも驚くくらいに冷たい声が出た。魔族とこうして話している、それだけで気分が悪くなる。とはいえ、人間のトップである王様が魔族との共存を決めたのだ。たかが一平民に逆らうこ

となどできようはずもない。
『魔族との共存、平和な世界を』そんなキャッチフレーズが大流行したのは三年前のことだったか。そんな奇麗事が言えるのも、流石は平民から搾取した金で贅沢できる王族と貴族だ。自分たちは魔族との全面戦争で前線に出ることなく、王都やその周りで連日パーティを開いているくせに、いざ旗色が悪くなったら『魔族との共存こそが、平和をもたらすのです』だなんて、ちゃんちゃらおかしい……と思っていたのは私だけだったみたいで、魔族との戦争に疲れきっていた人々はみんなこの考えに同調した。馬鹿としか思えない。
それから魔王との交渉もとんとん拍子に進み、ついには人間と魔族の戦争、古来より続けられてきた人々の営みは姿を消してしまった。戦争の変わりに現れたのは、私の目の前にいるような気持ち悪い魔族たち。今やこんな奴らが街を闊歩していたって、人々は気にも留めない。人間と魔族の共存社会は、上手く成り立っているのだ。苛立たしい事に。
そして、人間たちは新たな法を作った。『魔族も人間と同じ生き物とみなす』なんて感じに。要するに、魔族を殺せば裁かれる。人間を殺したら裁かれるのと同じように、魔族を殺したら犯罪なわけだ。三年前までは魔族を殺せば褒章がもらえたのに、世の中ってホントに不思議。
「おい姉ちゃん、おめぇ、さっきから俺のこと見つめてねぇか？おい？」
「いえ、そんなことは……！」
臭い息を吐き出しながら、この豚は私の肩に手を回す。振りほどきたいのに、力が違う……。必死に抵抗しつつも、悲しいかな私と豚の距離は縮まるばかりだ。
まわりの魔族たちも、下卑た目で私を見ている。思わず本気で吐きそうになるくらい、嫌なところに放り込まれてしまった。というか、臭い。臭すぎる。洗ってない犬の臭いがするのよ！　でも、そんなことを言えばまず牢屋にぶち込まれること必至なので、懸命に

こらえる。
「まさか、この僕ちゃんに恋しちゃったとかぁ～？」
「い、いえ、まさか……」
「おい、この子顔赤くなってますぜ、坊ちゃん！」
「イケイケですよ！」
何がイケイケか！　顔が赤いのは怒りと悲しみが混じってるからよ！　愛なんか混じってない！
そう叫びたいけど、この豚の息が臭すぎてもう正直何も考えられない状態。肩に回されていたはずの手は、どうしてか胸元にまで伸びてきてるし。
「俺、正直君みたいなコが好みなんだよね……」
「やめて……ください……っ」
「うぅん、イイ……。嫌がってるコを、無理やりってのは、マジサイコー」
この下衆……！　いや、いや、絶対いや！　純潔をこんな豚に捧げるなんて、それなら死んだ方がマシだ！　物の例えとかそういうレベルじゃなくて、本気で死にたい。
大体、何で人間と魔族が共存しなくちゃいけないのよ。こいつらは敵で、排除すべきもののはずなのに。まわりにいるお客たち、特に人間は見て見ぬふりを決め込んでいる。こんな可愛い娘が魔族に襲われかけてるってのに、なんて関心のなさか！　誰か、今助けにきてくれたら惚れてもいいわ！　そういう男はいないわけ！？　女でもいい！　アマゾネスとかさ！　いないよね、やっぱ！
ああもう、初めてをこんな豚に散らされて、私はこの先どうやって生きていけばいいって言うのだ……。いっそ犯されてる最中に舌を噛み千切って死のうか……。
いや、そんなこと考えてる場合じゃない。私には、夢があるんだった。
その夢を叶えるまでには、まだまだ死ねるものですか！
「お客様……」

「おお、何だ姉ちゃん、俺の愛を受けてくれる気に――」
「――なると思ったかこの豚野郎！」
太ももに回されていた革ベルトから、父さんの形見のナイフを取り出す。私は右手に握ったそれを、遠慮なく、ぐさりと豚の左肩に突き刺した。
「っ、ぎゃあああああっ！」
「ガタガタ喚くなこの豚が！」
豚は痛さからかゴロゴロと床を転げまわる。私は豚の腹に一発蹴りを入れて動きを止めた後、左肩に刺さっていたナイフを引き抜いた。汚い、濁った血が傷口から出てくる。ああ、もう吐きそう。
靴のつま先には鉄を仕込んであるので、さっきの蹴りはかなり効いたらしい。腹と血を流し続ける傷口を押さえ、情けなく鼻水と涎を垂らす豚の姿は醜悪極まりなかった。こんな汚いものは、掃除しなきゃね。
正直一瞬ためらったが、私は決めたらとことんやる女なので、豚の鼻っ面にまたもや蹴りを入れた。ぐしゃりと鼻の骨が折れる感触。叫びたくても、痛みから豚の息は既に絶え絶えだ。鼻と傷口を押さえるために手が動いた。
「ラッキー。腹ががら空き」
「え……」
「お望みどおり、騎上位よ」
仰向けになった豚の腹にまたがる。毛深くてホント嫌。でもま、仕方ない。
両手でがっしり握ったナイフを、人間で言う肝臓あたりにぶすりと突き刺した。
「っ、あ、ぎゃあああああああっ！」
「叫ばない！　次、行くわよ！」
お次は腎臓、胃、心臓、考えるのがめんどくさくなったので手当たり次第にぶすぶすぶすりと！
これは、かつてない快感だった。目の前に魔族がいても手を出せ

ないイライラから、ようやく開放されたような、すがすがしい気分。
刺すだけ刺して気がついたら、目の前の豚は事切れていた。
「これも私の夢のため、仕方ないわよね。うふふ」
「……残念だが、君の夢は終わりだ」
「え？　なによ……」
私のすがすがしい気分を邪魔するかのように、男の声が聞こえてきた。振り向いて見てみれば、鎧に身を包んだこの姿は……たしか……。
「あ、衛兵」
「その通りだ。女、いや、リィフィ・レイン。貴様を逮捕する」
「ちょ、待ってよ。何で私が逮捕されなくちゃいけないのよ」
私は特に悪いことはしていないような……と思って、ようやく気がついた。そういえば、魔族を一匹殺しちゃったんだっけか。
「魔族の者も、人と同列に扱う法がある。貴様は人殺しだ。来い！」
「あ、ちょ、乙女のか弱い腕に手錠なんて！」
「か弱い乙女が、人を殺すとは到底思えんよ」
衛兵の言葉に、ちょっとだけ納得してしまった自分が悲しい。
私の夢が叶えられる日、いつか来るといいんだけど……。

## （後書き）

ごめんなさいごめんなさい。
短編じゃない気もしますけど、大体残り二話くらいで終わる予定なので短編欄に……。
しかしまあ、ラブコメの方が書きやすいし、書いてても面白いです……。むぅ、こういうジャンルは向いてないなあ。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8079g/

魔王様に復讐を

2010年10月8日15時14分発行